

# 小林多喜二の 代表論

——『東倶知安行』から  
『蟹工船』へ——

荒木優太

## 序、「代議士をやめます」

---

初めに断っておかねばならないが、小林多喜二には代表論と名づけるべきようなまとまった作品が存在しているわけではない。この試論で取り扱うのは、多喜二の残した二つのテキスト『東俱知安行』と『蟹工船』から浮かび上がってくる代表 representation についての特徴的な思考の経過であり、作者多喜二が明確に意識し読者への伝達を欲望していたようなテーマや問題意識といったものではない。しかし、にも関わらず、ここで展開されるような読解の試みは決して無為なことではない筈だ。

どうしてか。それを説明するのに多喜二に先行する大正期の一人の作家の助けを借りることにしよう。『カインの末裔』や『生れ出づる悩み』など多喜二に先行して北海道の姿を多く描いていた有島武郎のことだ。

有島武郎は雑誌のアンケートで問われた「貴方が代議士であつたら」（『現代』大一一・四）という問いに、「代議士をやめます」と淡泊に答えている。この素っ気ない回答は、しかし、彼の晩年の思想を参照した際、極めて象徴的な応答として反響している。というのも、有島は評論「宣言一つ」の中で第四階級＝労働者階級であるプロレタリアの悲惨な労働状況に共感を示しつつも、しかし、自身がブルジョワ階級の人間であるという決定的な事実を前にして、彼らへの代表を引き受けることはできないという結論を出していたからだ。

「労働者は、従来学者もしくは思想家に自分たちを支配すべきある特権を許していた。学者もしくは思想家の学説なり思想なりが労働者の運命を向上的方向に導いていってくれるものであるとの、いわば迷信を持っていた。そしてそれは一見そう見えたに違いない。なぜならば、実行に先立って議論が戦わされねばならぬ時期にあつては、労働者は極端に口下手であつたからである。彼らは知らず識らず代弁者にたよることを余儀なくされた。単に余儀なくされたばかりでなく、それにたよることを最上無二の方法であるとさえ信じていた。〔中略〕しかしながらこの迷信からの解放は今成就されんとしつつあるように見える」（「宣言一つ」／『改造』大正一一・一）

この現状認識から、「私は第四階級以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人」であるとの有名な「宣言」をしていた有島は労働者を統べる積極的干渉を放棄し、大正一一年七月、亡き父から受けついで農場を解放して、農民に共有地として明け渡すという消極的干渉だけに留めた。

貧しいものの為に／代わりに社会を変えていくこと。有島はその任を放棄したが、勿論それは社会変革の夢や労働者への同情心の欠如を意味していた訳ではない。有島にとって問題だったのが、階級や境遇や経済状況を異にする他者存在に、自己が一方的に思い入れ同情し、彼に成り代わって「代弁」してしまうことへの越権意識（「特権」）であった。問題解決は問題の当事者によって果たされねばならず、その為の権力や任務を他の誰かに委託すべきではない。「代弁者」のもつ越権性を厳しく自己批判したこの有島の倫理感、「代議士をやめます」という言葉にも貫かれている。「代議士」とは国民の意志を代表する役職であり、「代弁者」そのものだからだ。

有島がニセコにある農場を開放してから、五年半後、小林多喜二は第一回普通選挙（昭和三年二月）に立候補した労農党の山本懸蔵の応援をするため、ニセコと同じく羊蹄山の裾野に位置する俱知安町に訪れていた。そこで多喜二は「有島武郎の「カインの末裔」に出てくる蝦夷富士の裾野を、雪に埋った鉄道を伝って四里も歩いて言ったときの印象は恐らく一生の間忘れることはできないだろう」ともう既に自殺してしまった先行する作家のテキストと自身の体験を固く結びつけていた（「総選挙と「我等の山懸」」／『戦旗』昭五・二）。

多喜二と『カインの末裔』というテキストは多く、生前未発表の習作で小説『不在地主』のプレテキストとなった『防雪林』との関係が研究史上で云々される。だが、取り合えず、そのことは焦点化しなくともよい。重要なのは、労働者の「代弁者」を拒否した作家が最後にもちえたプロレタリアとの記念的な地帯に、五年の月日を経てやってきたのがプロレタリア革命の為最終的に命さえ賭した闘争の作家であり、その来訪の目的が労働者の代表者の声を全国に拡げようとする選挙の応援だったという運命的な史実だ。勿論、多喜二が抱いた有島武郎という固有名は全く別の文脈のもとで想起されたのだろう。しかし、多喜二がその選挙協力の体験から得た短編小説は、図らずも有島の提起していた「代弁」的代表者の越権問題を孕んでしまっているように思える。

短編小説『東倶知安行』は昭和五年十二月の『改造』に発表された。しかし、稿自体は二年前の昭和三年九月五日に完成しており、この小説は多喜二が治安維持法と不敬罪によって起訴・収容された中で、経済的な事情という仕方なしの理由から、友人を通じて間接的に発表された。

『東倶知安行』が如何なる形で「代弁者」の越権問題を孕んでしまっているのか。詳細は以下の本論で取り扱いたいだが、先立っていえることは、前述した多喜二の体験を元に制作されたために、この小説の特徴は「選挙」という政治制度と「代表」、選びの仕組みと選ばれた者とを描き出しているという点にある。しかし、それはこの小説の半面に過ぎない。より重要なことは、組織の代表は一見、成員の意志を集約する正統性を得ているようにみえるが、そこには擬制が介在しており、選びの仕組みにさえ参加できないような者達が間接的に協力することで「代表」は維持できるという不可避的な構造を見出しているという点にある。

そして、その構造を見出した後で、『東倶知安行』の後執筆発表され、大きな話題を呼んだ多喜二の代表作『蟹工船』（『戦旗』昭四・五～六）を読んでもみると、代表に関する『東倶知安行』での問題提起を『蟹工船』が受け止め、部分的な解決の道筋を試みていることが分る。『蟹工船』では、「代表」はもう労働者の味方をしてくれない。その場合、如何にして労働者は権利を訴える組織の成員として組織化されるのか。代表なき組織形成はどのような条件で可能なのか。このような問いかけをテキストは限界的な状況を設けることで投げかけている。

『東倶知安行』から『蟹工船』へ。その間に「代表」というテーマを設けることによって、二つのテキストを多喜二の自問自答の一つの形として、通時的に読解することができる。これを我々は小林多喜二の代表論と呼ぶことができるだろう。

## 『東倶知安行』の代表論

『東倶知安行』の冒頭は東京の労働組合の事務室の描写から始まる。近く、第一回普通選挙があり、北海道から労農党の島田正策（モデルは山本懸蔵）が立候補する。事務所はその話題で持ちきりだった。

この選挙への熱気は当然労働者の切迫した悪状況と直結している。『東倶知安行』の世界に於いて、悪化する労働現状は容易に拾い上げることができる。「キットその工事中に何人かの犠牲者を出す」ことが予測される「コンクリート工事に行く人夫」、「土工部屋から追い出されてきた（一見してそうと分る）垢だらけの乞食のような男」（何れも第二章）、汽車で集団移動する安い労賃の「朝鮮人の群」（第三章）等等。

このように、前提条件として、労働者権利を訴える組織の必要性を明示するかのようにテキストは名もなき労働者の姿を多数点描している。しかし、その要請と共にこのテキストが同時に語っているのは、その組織が未成熟であるという現状、要請とのギャップでもある。島田の応援のため、汽車に乗って北海道に向う語り手「私」の仲間の鈴木は夕張での組織の状況を次のように悲観している。

「いや、あすこは失敗するよ。何んだって 未組織 だ。これが重大だ。まだ 発端 という処にさえも行っていないんだ。いくら氣勢ばかり上げたって駄目さ。みんな買収されてしまうさ」（第二章）

投票権 voice と貨幣の交換の誘惑、そして実際に交換してしまう人々。その詐術的行為は、貧窮を押し付けてくる世界を変える為の声 voice を明け渡すことなのだから、必然的に悪循環的なサイクルを描かざるを得ない。このような状況が鈴木という「未組織」であり、そこから回復、つまり「組織」が要請される。鈴木はその後もしつこく同じことを繰り返す。

「小作人は小作人で組織もされず散らばっているから、カラ駄目です。だから、この選挙を機会に組織の方に入っていかなければならないと思ってるんです」（第五章）

しかし『東倶知安行』というテキストは、組織を形成せよ、という目標に戸惑っている。それは「私」が東倶知安で出会う極めて印象的な二人の運動家の対照に象徴される。一人は、勿論、応援の当の対象であった島田正策（略して「島正」）だ。島田は結果選挙で敗北するものの、「全国的な人気闘士」であり、作中では「我等の島正」として多くの同志に囲まれながら彼らに声をかける姿が描かれている。

もう一人は、「私」が東倶知安で群衆に応援演説をする一つ前に演説していた、水沢という七十歳に近い「老人」である。十八歳の頃から運動に参加していた老人は、酒を飲むと幸徳秋水と知り合いだったというエピソードを盛んに披露する癖をもっている。そして、より「私」に衝撃を与えたのが、彼の娘が労働運動に没頭していく老人に代わって工場に勤め、最終的には娼婦まがいの行為で家族を養う金を得ていたという「悲劇」的な事実であった。「私」はこの事実を知って、二人を対照的な眼差しな眺め、憂鬱になる。「私は島正と老人をぼんやり見ていた。島正はそれでも全国的な人気闘士だった。（語弊はあるが、云ってみればそうだった。）「我等の島正」――普段そんな風に、それも全国的に云われてさえいた。私はその側に老人のいることを不思議に深い気持で眺めた。理由が分らず憂鬱になってきた。

北国の一寒村に於ける「島正と老人」――私はそれが歴史的に何か重要な意味をもった、しかもキット何時までも心に残る一つのシーンであるような幻想に捉えられた」（第六章）

「島正」も「老人」も同じ運動家、「同志」だ。しかし「私」から見た両者の印象は背反するように対をなしている。端的にいえば、島田は表で、水沢は裏だ。共に精魂こめて運動に情熱を傾けてきたにも関わらず、前者は全国的に名前が知られヒロイックな取り扱いを受けるのに対して、後者は弱視と聾の身体で誰かが止めないと朝まで演説をしてしまう「ユーモラス」な印象を読者に与えている。特に演説会が終了後の描き方は一層露骨だ。つまり、停車場で島田が地方の同志たちに囲まれているなか、遅れてきた鈍い老人は一群と離れ、皆を見失ってしまう。「皆は、老人のいた事を忘れてしまったのだった」（第六章）。

組織が形成されると、そこには光と影、表と裏、正面と背面ができる。ここに会社勤めをしており、「裏の仕事」しかこなせないことを齒がゆく思っていた「私」の「憂鬱」の原因が存在しているといってもいいだろうが、ここでは「私」の私的な心理よりもより一般的な問題として捉えてみたい。つまり代表という制度（代議制）の問題だ。

代議制 representation は組織を論じる上で不可欠の機能であるように思われる。英語の representation は表現、表象、上演、再現等、多様な意味合いをもつ言葉であるが、その中には政治的な「代表」も含意されている。その原義は re（再び）＋ present（現前）させるという再現前化の作用に求められる。例えば、表象とは一度眼の前にしたものの（現前したもの）が不在になったとしても心のなかで再び思い描いた像のことを指しており、現前したものを再現前化しているといえる。

では、政治的の代表者は何を再現前化しているのか。端的に答えるならば国民や組合員といった組織体の成員の意志だ。政治組織はその所属成員の数が増せば増す程に、意志や要望の数と種類の雑多性は増加し、それを具体的な意見や政策として集約させることが難しくなる。民主主義の教科書的に答えるならば、この混沌的な状況を整理し、意志を集約させるのが一人（或いは低人数）の代表だ。代表者は個々の成員の意見を集め、代弁的に外部へ表現する。現前する様々な成員の声を拾い上げ、それをまとめ、組織の意見として再現前化するのが代表の役割だ。このようなプロセスを踏むことで組織の行なうコミュニケーションが可能になる。

島田は国民の代表になる為に選挙に立候補する。しかし、それ以前に島田は実質、代表的な機能を担っていたというべきだ。何故なら、彼は党公認の政治家であり、また「全国的な人気闘士」で「我等の島正」とさえ呼ばれている。彼は労農党に帰属する成員とその支援者からの支持を一身に受けている。その土台があって、初めて国民代表への立候補が可能になるのだ。しかし、一方の水沢老人の境遇は島田とは違う。彼は組織の平準的な一成員に過ぎず、「同志」からさえしばしば忘れられてしまうような、瑣末な存在に過ぎない。

多数の意志を集約させる代議制はこのように、一種偶像化された少数の代表者（「我等の島正」、「レーニン」、「幸徳秋水」）を産み出す一方で、必ずその底部には彼に意志を委託した多数の成員が潜在するというピラミッド的構造を要請する。そして、その成員がいくら組織に奉仕していたとしても、しばしば「いた事を忘れてしま」う程に与える印象は薄いのだ。『東俱知安行』はこの老人を島田と対比させることで、代議制（如いては未組織から組織への転換）の為に直面せねばならない不可避な構造を課題的に提起している。「私」はそのギャップに戦くのだ。

しかし、そもそも「組織」とは何処から何処までの領域を指すのだろうか。「組織」の境界とは何処にあるのか。組織内部の意志を吸い上げることに代表の存在価値があるとして、しかし、汲み上げるべき意志は本当に組織の内側へと包摂していたのだろうか。そもそも、その判断は誰がすればいいのか。ノーマ・フィールドの次の問いかけはこのような論点を提起させる点で注目値する。

「私」が寺での演説で明言しているとおり、誰を選ぶか、いちばんよく分かっているのは――選挙権はないが――「薄暗い惨めな台所で、雑巾切れのように働きつか」れている妻であり、母親である、ということ。さて、この事実と、鈴木一家と、水沢の娘の例と、どうつなげて考えたらよいだろう。しかも「うそ」にならないように」（『小林多喜二』第二部第三章、岩波新書、平二一・一）

フィールドのいうように、「私」は演説で、「誰を選ばなければならないかは、然し諸君等よりもモットはつきり、そして適確にその事を知っているものこそ誰あろう、あの薄暗い惨めな台所で、雑巾切れのように働きつかれ、永年の貧苦に打ちのめされている諸君等の細君であり、諸君等の年老いた母親なのである！」（第五章）と明言していた。引用中の鈴木一家の例とは、鈴木が家を出る前に妻を殴ってきたことを指すが、その事実が象徴しているように、このテキストはそのような本来汲み上げられて然るべき女性の

声を徹底的に排除して成立しているように見える。実際、テキスト内に名をもった女性自身による発言は一つも記されていない。

そもそも、考えてみれば第一回普通選挙において女性は投票行動すら認められていなかった。にも関わらず、国民の「代表」は成立していく。このように考えてみたとき、代議制のもつ擬制性 fictionality（「うそ」）が浮き彫りになる。これを時代的制約による制度の不備だと考えるべきではない。大森彌は代議制が根本的に持つ虚構性の介在を次のように述べている。

「首長と議会が自治体としての意思を公式に決定できる権限をもつのは、選挙を通じて民意の審判を受け、代表者であるから見なされるからである。見なす、というのは一つの擬制（フィクション）である。もともと違う人間が別の人間の意見や利害を代わって表現することはできないが、代表という考えは、本来はできないことを世の中の約束事として、そう見なそう、という工夫（からくり）であるといえる」（『新版 分権改革と地方議会』第五章、ぎょうせい、平一四・九）

代表者は成員の意志を代表していると「見なす」、その制度が代議制である。「見なす」という擬制の介在によって多数者の雑多な意志を簡潔に表現するという「本来はできないこと」が可能になる。しかし、それは飽くまで擬制の上でのことであって、代表者が本当に成員の意志を反映しているかどうかは分らない。そもそも成員と成員でないものの判別基準そのものが恣意的だ（女性参政権の例は前述したが、古代アテナに於ける奴隷階級、公民権運動以前のアメリカに於ける黒人等の世界史にみられる例は特徴的だろう）。代議制を構築するためには、地理的に、権利的に線を引き、その外に位置する者は無権者として定義されなければならない。しかし、その描線は既に絡み合っている成員と非成員との諸関係を引き裂くように横断してしまう。例えば『東倶知安行』が描き出していた無権的であるにも関わらず運動家の補佐をする女性たちのことを思い浮かべればよい。

多数者の集合から彼等を代表する代表者の選出には、一種の飛躍がある。『東倶知安行』というテキストには、このジャンプに対する動揺が書き込まれている。勿論、水沢老人は島田への支持を虚構ではなく現実のものとして表明している。しかし、老人を支えていた娘は果たしてどうなのか。「組合」の手伝いをしていたからといって、彼女が島田を支持していたかどうかは分らない。明言されていない娘の声は公平であろうとするのなら当然宙吊りにしておかなくてはならないだろう。

しかし考えてみれば、「代表」ではないにしても、その娘は老人の代わりに働き、生計を立てていた。島村輝のいうように「老人が運動に専心することを保証しているのは、彼の娘である。そしてカノジョこそ、犠牲という点では最も大きな犠牲を払っている」（註一）。或いは、鈴木本の妻にしても三週間もの間家を空けていた夫と口論になりながらも夫の代わりに「何も無くなったから、飯を炊く炭や石炭を貯炭場から盗んでくる」と家存続に努める。そこでの代わりとは「代表」のもつ多数の意志の集約の意味ではなく、代理＝補填 supply と呼ぶべきような尻拭いであり、穴埋めであり、対症的処置だ。その下支えがあって初めて老人や鈴木本の成員的活動が可能になる。言葉遊びをすれば、代表 representation の擬制に参加するためには、無数の代理 supply の犠牲が不可避であるような構造がここで見出されているのだ（註二）。

伊豆利彦（註三）が指摘している通り、『東倶知安行』は「何代がかりの運動」の語を二度使用し（第二章、第六章）、運動の持続性の重要性と困難を強調している。しかし、例えば組合の正規成員でもない女性たちは、一般的にいつて次世代を産む不可欠な要素である筈なのにも関わらず、その本質的な要素は飽くまで組織の外部に排除され、しかも結果的に組織の成員は自身の代理＝補填を彼（女）らに外部委託せねばならない。

序で紹介した有島武郎の「代弁者」問題との連関でいえば、このテキストは「代表」や「代弁者」を擁立してしまうことへの躊躇が表現されている。有島は棄権するようにしてその行為を自己批判した。しかしその一方、その状態のままでは『東倶知安行』での点描が示すように、苛酷な労働者は「未組織」なまま放

擲されかねない。彼らの生の声は容易に買収されていく。労働力だけではなく政治的意見さえも搾取されるのだ。しかし、この状況に対して、代議制を介しつつ「組織」として連帯していこうとすると、途端に組織の裏と表が構成され、しかも、裏は更なるその裏側（外部）で代理＝補填的に下支えしている非成員や無権者達の犠牲を求めてしまう。一時「私達こそ こういうもの達の云おうとして云い得ず悶絶したその事実を、彼らに代り叫び知らせてやらなければならない」という演説によって「代弁」を味わいつつも、その後、組織の裏方を支え更に代理となる娘をもった老人に幾ばくかの金を与える行為は、そのジレンマを象徴しているといえるだろう。しかしながら、動機はどうあれ、その行為は投票権を金に変える詐術と何が違うのだろうか。『東倶知安行』はこのようにして、「組織」化に潜む残酷な構造をアポリアとして提出するのだ。

『東倶知安行』の読解を経た我々は、海上での苛酷な蟹缶詰作りで喘ぐ労働者と彼らの闘争を描いた多喜二の代表作『蟹工船』を『東倶知安行』の後続するテキストだと読み込む準備を整えている。その本質は、代議制批判にある。『東倶知安行』と同じく、『蟹工船』においても代表と代理の組合せが機能している。しかし『東倶知安行』と違って、ここで登場する強力な代表は最早労働者たちの味方をしてくれない。しばしば見逃され易いが、会社の「重役」（テキスト後半では「社長」と呼称）が「代議士」として立候補しようとするいくつかの言及は重要だ。

「利口な重役はこの仕事を「日本帝国のため」と結びつけてしまった。嘘のような金が、そしてゴッソリ重役の懐に入ってくる。彼は然しそれをモット確実なものにするために「代議士」に出馬することを、自動車をドライブしながら考えている」（第二章）

引用文中の「この仕事」とは勿論蟹漁と缶詰作りを指している訳だが、その他、中積船が到来し活動写真を船内で写す会における弁士の言葉「今度社長が代議士になるって云うし」（第五章）や給仕の「今度社長が代議士になれば」云々（第六章）など『蟹工船』には、テキストには前景化してこない上位の統括者の動向が微妙に書き込まれている。一企業の長に過ぎない統括者が、私的領域を超えて、「代議士」という公的資格を獲ようとする。より興味深いのは、その動きが蟹漁の公的性格付け（「日本帝国のため」との連関が認められるということだ。

事実、重役の目論見は成功しており、テキスト内でもそのことを観察することができる。先ずそれは現場監督の浅川によって「この蟹工船の事業は、ただ単にだ、一会社の儲け仕事と見るべきではなくて、国際上の一大問題なのだ」や「日本帝国の大きな使命のために、俺たちは命を的に、北海の荒波をつっ切っていく」（第一章）等と船員に伝達される。これに対して乗船している労働者は、感化されるように国家的事業を意識して「日本人はやはり偉いんだ、という気」になって「毎日の残虐な苦しさが、何か「英雄的」なものに見え」てきたり、日本国旗がはためく駆逐艦に「あれだけだ。俺たちの味方は」と思ったりする（第五章）。この延長で、労働者達が叛旗を翻し監督に「要求条項」をつきつけた次の日に、帝国駆逐艦が彼らを護送する目的でやって来た時も、多くの労働者達が「俺たち国民の味方だろう」と誤った期待を抱いていたということは重役の意図したことの浸透の程度をよく物語っているだろう。

会社の重役が「代議士」という国民の代表になる経過と同期するように彼の下で下働きをする労働者にも日本帝国への帰属意識（「国民」という成員意識）が芽生えている。しかし、それは代表化作用の結果であって、決して原因ではない。実際、『東倶知安行』の場合以上に、『蟹工船』には代議制の擬制性が容易に見て取れる。ここでの代表選出には、多くの人々が参加でき、尚且つ議論やその為の暇が保障されているような公開的な選挙制度（投票行為）は介在しておらず、当然、多様な思想や生き立ちをもった多数者の合意が求められていない。勿論、『蟹工船』の船員の意志は全く汲み上げられない。しかしにも関わらず、代表が出来上がっていく。そして、原因と結果が反転するようにして、合意したと「見なされた」者たちに国家的事業の命令が「仕事が国家的である以上、戦争と同じなんだ。死ぬ覚悟で働け！」と、恰もそれが正統であるかのように下る。

『東倶知安行』で我々は代表の擬制を実際的に維持するのは代理の犠牲に拠るものだという事を学んだ。ここで代議制のツケを払わされるもの達——『東倶知安行』でいう処の女性たち——とは、「地獄」蟹工船に押し込められた無数の労働者達だ。『東倶知安行』では「組織」を形成し、自身の代理を外部に委託しつつ、自身らの代表を支援していた労働者が、今度は自らが代理 supply の犠牲の役目を請け負うことになる。彼らの死活を賭けた労働は、多量の蟹缶を産み、最終的に会社の「儲け」に回収されていく。娯楽提

供のため蟹工船を訪れた活動写真の弁士によれば「この会社がここへこうやって、やって来るために、幾ら儲けていると思う？ 大したものだ。六ヶ月に五百万だよ。一年千万円だ。〔中略〕こんな風にしてもひどくしなけア、あれだけ儲けられない」（第五章）。このように代理の「ひど」さ（犠牲）が代表化する重役の資本と社会的政治的影響力を支える。

加えて、『東倶知安行』の例が示していたように、一一たとえ労働者に日本への帰属意識が芽生えているからといって一一外部委託を請け負う代理役は組織（この場合は国家）の正規成員として認められている訳ではない、ということは重要だ。『蟹工船』でもそれは同様で、監督に叛旗を翻すと、駆逐艦に乗った海軍人によって「不忠者」「露助の真似する売国奴」として労働者の一部は処罰されてしまう。組織内外の境界線は恣意的に引かれ、彼らは正規の国家成員としての権利は認められず、代理＝補填の請け負い人たちは都合のいいように仮包摂と仮排除の操作によって酷使される。

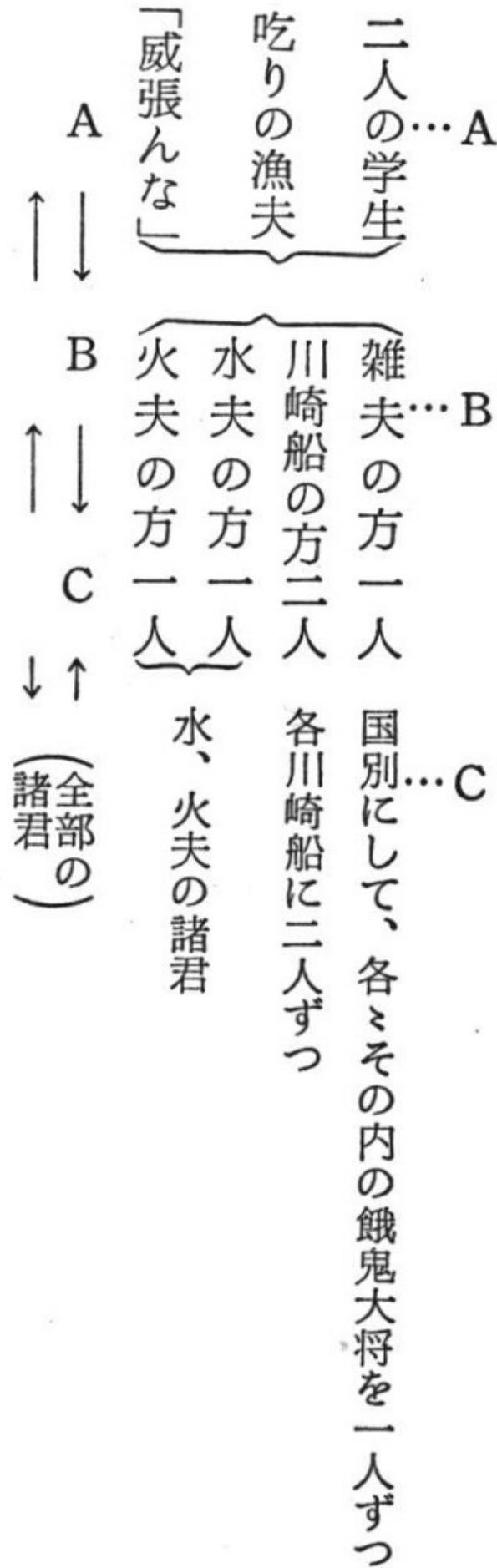
『東倶知安行』の場合と『蟹工船』の場合とで、代理者の問題にはどのような差異があるのだろうか。問題は外部と呼ぶべきものの散逸状況にある。前者に於いて、組織の外部で行なわれる個々別々の代理＝補填行為はそれぞれの生活現場だけで要求され、そこだけで完結しており、複数の代理＝補填が連動することはなく、散逸していく。内部に対して外部が空間的・時間的にズレているために、代理者同士の相互認知が図られない（鈴木の本の妻が老人の娘のことを知ることはないし、その逆もそうだ）。しかし、後者において外部が一つの隔離した場所にまとめられている。海上の監獄としての蟹工船、そこから逃走するには（労働者の一部が嵐のなか漁の途中彷徨いロシアに流れ着いたように）遭難するか端的に死ぬしかない。その閉鎖性によって、代理＝補填が連動する（註四）。或いはそれ以上に、そもそも代理行為が協働的にならざるをえない強制力が存在している。ここに『東倶知安行』と『蟹工船』を分かつ大きな差異がある。

この状況の前提は、逆説的な展開をみせることになる。何故なら、前者にあっては労働者の「未組織」が問題であり、代議制などをきっかけとして強固に組織化しようとしても、残余として包摂できない代理＝補填が組織の外部に生じ、皮肉なことにその外部委託が「組織」活動の持続を支えていた。これに対し、後者になると、一つの限定された場所に集められた外部が代理の連動と協働を通して、「未組織」問題が提起されていないのにも関わらず、自然に新たな組織内部が発生していくことになる。多喜二は蔵原惟人宛の書簡で「この作では 未組織な労働者 を取り扱っている」（昭四・三・三一）と述べているが、組織者不在の『蟹工船』が『東倶知安行』以上に組織化の力動を描いているのは皮肉だ。

このようにしてみたとき、我々は『蟹工船』というテキストを『東倶知安行』での問いに一部応答したテキストだとみなす視点を手に入れている。『東倶知安行』で見出された認識は、労働者のための「組織」の代議制がその外部に犠牲を得なくては持続可能なものにならず、しかもしばしば彼らを包摂することができないという難問だった。しかし、『蟹工船』では組織化の弱点の発露ともみえるこの認識が、特殊な状況がもたらす布置の力能をえることで、外部が独立してゲリラ的に現場で運動していくことの可能性、寧ろ外部への放逐があつてこそ可能になる組織（内部）形成の可能性へと転化していく。

しかもそこでの新たな組織は、『東倶知安行』の世界に反抗するように代表を必要としない。一度、監督に抵抗するため、『蟹工船』の労働者は団結する際に「代表」者を選出した。組織の具体的な配置は、学生

発案（責任者の図）



が書いた右の図のようになるが、

発案の組織体系は結局の処、失敗に終わってしまう。というのも、十二人程の代表者たちが「要求条項」が書き込まれた誓約書をもって監督に抗議するのだが、その翌日、日本帝国の駆逐艦が現れ代表者の九人が護

しかしこの学生

送されてしまったからだ。

ここでは、労働者たちが意図せずに、敵となる資本家（「代議士」となる社長）の戦略を模倣してしまっている。蟹工船に代表は必要ない。労働者の一人は「ああやって、九人なら九人という人間を、表に出すんでなかった。まるで、俺たちの急所はここだ、と知らせてやっているようなものではないか。俺たち全部は、全部が一緒になったという風にやらなければならなかったのだ」（第十章）と反省し（つまり意志の集約点の露呈）、次は労働者全員でストライキをする計画によって一応の成功を勝ち取ることができるが、これにもう一つ付け加えるならば、一つの閉鎖された場所に集められた成員の密集性は全面的な現前化 present に既に成功しており、そもそも代表＝再現 representation の必要性を無化していることが指摘できる。

『蟹工船』の空間はあらゆる出来事が現前化され、秘匿の不可能な空間と化している。例えば、船内で労働の苛酷によって雑夫が逃亡するが、その二日後空腹でボイラー室から出てきて捕まってしまう。逃亡したとしてもその行く先が閉ざされているために身体的限界が秘匿の失敗と直結するのだ。或いは、雑夫が漁夫にレイプされるのを別の漁夫が「目の前」で偶然目撃してしまう場面だ。この「夜這い」はテキスト内で二度言及され、二度目の観察者（コック）は「閉めろッ！ 今、入ってくると、この野郎、タタキ殺すぞ！」と漁夫に怒鳴られる。これらの挿話が示しているように、閉鎖的な船内では個々人が私密的な空間をもつことができず、常に他人との接触に晒される。それはレイプのような犯罪行為さえ同様で、第三者が偶然にも遭遇してしまう。高橋博史（註五）は浅川監督が何の予告もなく漁夫らの室に入出入りしていることを指摘し、その支配力を考察しているが、それ以上にそもそも蟹工船は密室を構成できるような空間的ゆとりが存在していないのではないだろうか。

この圧縮密閉された空間が、しかし代表不要な組織を準備する。というのも、そこでのあらゆる会話や仕事は全て公開的で、寧ろ秘匿の方が難しい。そのために、わざわざ多数の意見を聴取したり、整理するという代表的手続きを踏むよりも先に、個々人の行為（例えば、働かないという行為＝ストライキ）そのものが政治的空間に直接反映される――と意識できる――。隔離に等しい閉鎖空間は、寧ろそれ故に却って全公開性を獲得し、新たな政治空間を準備する。投票権＝声 voice を介す必要がないようなその空間では代議制はその弱点しか露呈しないのだ。

『東倶知安行』と違って、『蟹工船』には組織者（オルガナイザー）が登場しない。というのも、「てんでんばらばらのもの等を集めることが、雇うものにとって、この上なく都合のいい」（第一章）ので、蟹工船に入船させる際、会社は組合員などを除けて「云いなりになる労働者を選ぶ」からだ。しかし、この未組織な群集の塊りこそが『東倶知安行』以上の組織的活動を展開する。

「――何時でも会社は漁夫を雇うのに細心の注意を払った。募集地の村長さんや、署長さんに頼んで「模範青年」を連れてくる。労働組合などに関心のない、云いなりになる労働者を選ぶ。「抜け目なく」万事好都合に！ 然し、蟹工船の「仕事」は、今では丁度 逆に、それ等の労働者を団結――組織させようとしていた。いくら「抜け目のない」資本家でも、この 不思議な行方 までには気付いていなかった。それは、皮肉にも、未組織の労働者、手のつけられない「飲んだくれ」労働者をワザワザ集めて、団結することを教えてくれているようなものだった」（第八章）

閉鎖的な現場と全面現前的な「仕事」が共有されることで代議制の不要な組織、行為や態度が意見の表明に直結するような空間が立ち上がる。『東倶知安行』のジレンマを解消したような闘争のユートピアが、皮肉にも「地獄」で実現されるのだ。会社が行なった、出自の違う様々な農民や漁民や学生を一つの場所に集めるという労働運動にあって一見否定的な条件を逆手にとるようにして、『蟹工船』は『東倶知安行』で露呈していたジレンマの限定的な解決策を提示するのだ。

## 結論、「代表」作としての『蟹工船』

『東倶知安行』で見出されたのは、代表＝再現 representation の擬制の根底には、無名的に多数外部で行なわれている代理＝補填 supply があり、それがなければ「組織」活動を維持することはできないというジレンマの構造だった。このジレンマを解決するのが、『蟹工船』だ。このテキストでの組織成員は最早、代理＝補填を外部に依頼する必要がない。何故なら、自分達が外部それ自体であり、その現場で自足して新たな組織を生み出すからだ。前者において達成課題（「我等の島正」）だった代表の論理は、後者になって寧ろ打倒目標（「代議士」化する重役）へと変化する。この手続きによって、ジレンマが止揚されるのだ。

しかし、『蟹工船』は代表の論理を手放したのだろうか。それは疑わしい。これは『蟹工船』というテキストの形式そのものに関わる。『蟹工船』の附記の最後の最後でこうテキストは締めくくられている。「――この一篇は、「殖民地に於ける資本主義侵史」の一頁である」。

『蟹工船』が「一頁」だとして、果たして他の頁にはどんなことが書かれてあるのだろうか。実際、その附記が記している処によると、「「サボ」をやったりストライキをやった船は、博光丸だけではなかった」。では、それら別の船ではどんな虐使が、或いはどんな闘争が行なわれていたのか。我々は別の闘争の存在を予感しつつも、それを仔細に読むことはできない。しかし、予測することはできるだろう。何故なら、『蟹工船』というテキストそのものが、記録されなかったけれども同時多発的に紡がれていた筈の無数の〈もう一つの『蟹工船』〉を代表しているからだ。

『蟹工船』は小林多喜二の名実共に「代表」作だと断言できる。第一に、名の面に於いて、このテキストは多喜二に多大なる名声を与え、大量の読者を獲得した。以降もプロレタリア文学の傑作として翻訳や研究の対象とされる頻度が多喜二の作品の中で最も多い。しかし、それ以上に、実の面に於いて、『蟹工船』は代表批判の物語を代表的に描き出すというアクロバティックな形式を創造している。『蟹工船』を読んだ誰もが直接には言及されない幾多の『蟹工船』世界を想像しない訳にはいかない。『蟹工船』本編にはその幾つもの蟹工船、何百もの「頁」の意志が仮託されている。ここにテキストを一地域の特殊事例に限定させようとする試みがある。これが「代表」的『蟹工船』の名作の所以だ。

しかし、その背面には『東倶知安行』という前提となったテキストが存在していたことを忘れるべきではない。というのも『蟹工船』は組織問題の全てを解決した訳ではないからだ。実際、代議制の不要な組織活動は蟹工船という或る限定された空間においてのみ初めて可能になる。或いは、〈もう一つの『蟹工船』〉の示唆でも明らかのように、「ばらばらのもの」の集合は、別の形での分断を産む。その細かい分断が、全てが現前化される代議制不要な空間の条件となる。そして、そこにテキストの形式そのものが「代表」的に機能せざるをえない所以もある。『東倶知安行』のようにそこで更なる外部での代理＝補填が発生しないのは、分断されたブロック同士の物理的な距離と関係の絡まりあいの切断が確保されているためだ。或る労働者が述べているように、孤立した蟹工船で「代りを函館から取り寄せるのには遅すぎる」（第十章）。

しかし逆に言えば、そのような特殊な条件を満たさなければ、つまり現前性を越えて再現前性を要求してくる距離が解消されなければ、代表の制度化、組織の表裏、擬制の犠牲は自然に再び立ち上がってくる。多喜二のテキストが見出したのは個々人の実生活に於いて錯綜化している諸関係の現実であり、そこに組織の境界線を引こうとすれば、どのような仕方であれ恣意的にならざるをえず、しかも必ず犠牲が伴われるというジレンマは依然として存続している。『東倶知安行』は『蟹工船』がもつ雄雄しい闘争的な虚構の裏側に張り付き、常に反省を促してくる。

『蟹工船』は附記において「「組織」「闘争」――この初めて知った偉大な経験を担って、漁夫、年若い雑夫等が、警察の門から色々な労働の層へ、それぞれ入り込んで行ったということ」を伝える。これこそ、

『東倶知安行』が問題にしていた世代間さえ繋ぐ「何代がかりの運動」の実現そのものだ。しかし、そこに入り込んでいった多数の運動経験者が果たしてそれぞれの現場を上手く組織化できたかどうかは疑問だ。彼が組織者（オルガナイザー）のように振舞ってしまえば、組織者なしで実現された『蟹工船』の経験を反復することはできず、寧ろ『東倶知安行』の「悲劇」を反復するかもしれない。

『東倶知安行』と『蟹工船』を裏表の関係で読むこと——恰も老人と島田を対照的に眺めるように——。このテキストの対は闘争のユートピアを示唆しながらも、それが正しく非-場所 utopia であることを示している。代議制とは別の仕方での組織編制の可能性、代理なしで（フィールドの言葉を使えば「うそ」なしで）政治的な声を上げることの可能性は一つの理念的な闘争形態でしかなく、現実には『東倶知安行』の世界が待ち構えている。

しかし、依然として選挙や代議制といった通常民主主義の根幹をなすような諸制度を自明視することなく、別の仕方を探っていた小林多喜二の代表論の試みは重要だ。『蟹工船』での試みは端的に労働者の闘争の方法である同時に、『東倶知安行』の文脈から考えると、政治的空間から除外されていた（例えば女性のような）代理者の犠牲を回避する術の探求でもあったといえる。その観点にあって、例えば「政治と文学」論争で貼り付けられた女性を蔑ろにする多喜二像には、再考の余地が与えられるだろう。多喜二のテキストは「代議士をやめます」の後に続く言葉を探し続けている。

(註一) 島村輝「観察する「私」・行動する「私」——小林多喜二「東倶知安行」の語り手」／『日本文学』平一〇・一。

(註二) 代表と代理の区別は、代議制の議論に於いて多く使用されている。例えば、佐々木毅『民主主義という不思議な仕組み』(ちくまプリマー新書、平一九・八)第三章などを参照。或いは、吉田徹は『ポピュリズムを考える』第三章(NHK出版、平二三・三)のなかで、政治思想史における二つの代表の考え方、つまりバーク的=責任的代表とルソー的=反映的代表の系譜を整理しているが、これは代表と代理の区別に等しい。但し、注意しておきたいのは、本稿で使用した supply という語は政治学的語彙ではなく、本稿での「代理」概念の使用は上記の政治学的な使用とは異なるということだ。この語は sup(十分に) + ply(満たす)で構成されており、足りないものや欠落したものの代わり／補いの意味をもつ。政治的空間が一見関係ないようにみえる生活空間にその補助を要求するという本稿での議論を鑑みて、政治学的法律的語彙ではないこの語を敢えて代表との対比で用いる。

(註三) 伊豆利彦「東倶知安行」／『小林多喜二読本』収、多喜二・百合子研究会、昭五〇・七。因みに、島田正策のモデルである山本懸蔵が書いた、テキスト内でも言及されている印象記「北海道血戦記」(『改造』昭三・四)は落選を受けて「労働者の貧困と、農民の窮乏と、無産階級の圧迫と、ある限り、われらのたたかいは永久に続く——たたかいはこれからだ。最後の苦戦を突破しよう」と結んでいる。しかし、その「永久」や「これから」という組織の持続的な側面を実際に支えているのは犠牲を外部委託された代理者達ではないのだろうか。

(註四) この閉鎖性は情報遮断(情報の閉鎖)をも産んでいる。芝浦工場にいた雑夫が教えるストライキについての東京と工船との情報格差などから『蟹工船』の「情報小説」性を見出した日高昭二「蟹工船」の空間(『日本近代文学』平一・五)を参照。

(註五) 高橋博史「蟹工船」論——封じられた光景——」／『国語と国文学』平二一・十二。

(本文の引用は『小林多喜二全集』(新日本出版社)を使用した。但し、文中の傍点は下線に置き換えた)。

(2012・2・1)

小林多喜二の代表論——『東倶知安行』から『蟹工船』へ——  
<http://p.booklog.jp/book/43666>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/43666>

ブックログのpapier本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/puboo/book/43666>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.